

第72回全国高等学校演劇大会(秋田大会)

第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門

生徒講評委員長

生徒講評委員会 担当委員

秋田県立横手高等学校

石河 かずは

全体講評

今大会では、差別や戦争等の規模の大きい社会的な問題を身近に感じるような、今、高校生の目線で見るということに大きな意義を感じる作品ばかりでした。

常に変化し、何が正しいのかも定かではないこの世の中で、この先私たちひとりひとりがより良い方向に人生を歩んでいくために必要なもの、大切なものが各上演のなかに詰まっていたように感じます。

この三日間のなかで、各上演から受け取ったこと、学んだこと。それらを委員全員で共有し、一本一本全力で言葉を尽くし、討論を行いました。上演から得たものを、討論を通して委員それぞれが自分自身の人生の財産とすることができたのではないかと考えています。

それでは、各上演について講評させていただきます。

上演1 北海道千歳高等学校「ぐるぐるランドリー」

コインランドリーを舞台としたこの作品からは、他人に対する妬みや対抗意識などの私たちにとって身近な感情が、時には誰かを深く傷つける行為につながっていくという危うさ、そして同じことを繰り返しても結末までは同じにはならないという「変わろうとする姿勢」を示すことの大切さを感じました。

上演2 山形県立山形東高等学校「ばいす/のいず」

自分を想ってくれる誰かが、ノイズの中にいる苦しみを遮断してくれること。そして、自分の声が誰にも届かない孤独に、そっと寄り添ってくれること。この作品からは、人と人との温かく結びつけ、そして孤独に苛まれる人を救い出す音楽の力、そしてそれによって繋がれた人の想いの強さを感じました。

上演3 聖霊高等学校 「BONE to be loved」

火葬場を舞台に、登場人物たちによって語られる言葉の数々は、誰もが同じように愛情をもって他者に接していること、そしてその愛情に優劣をつけることは不可能であるということを教えてくれました。終盤には、故人に対してたくさんの思い出を、そして叶わなかった未来を語って涙する登場人物の姿に自らの経験を重ね、救われたという講評委員もいました。

上演4 私立 金蘭会高等学校「ドカ食い上等！～タラバガニ伝説～」

複数の宇宙という壮大なスケールで物語が展開していくこの作品は、規模が大きくはありながらも、何気ない日常の幸せへ目を向けるきっかけになりました。今を生き抜くことが幸福な未来を作り上げるのだということ、私たちの知らないどこかで必死に生きている人がいるのだということを改めて認識し直しました。

上演5 徳島県立城南高等学校「空席」

周りよりも少し遅れて卒業を迎える登場人物たちは、私たちと同じように将来への不安や大人にならなくてはならない寂しさなどを抱えていました。題名の通り空席だらけの教室で言葉を交わす登場人物たちの姿に、高校生という大人と子供の境界線上にいる私たちは深く共感し、そして未来を自分の足で歩くということに対する覚悟や勇気を感じました。

上演6 山口県立光高等学校「MorW（もう）」

環境の変化や、自分ではない他者によって与えられる幸福に反発する自己中心的な独占欲とも呼べる感情は、思わず「もう」と言ってしまうほどやるせなさやもどかしさを感じさせました。しかし、その無力感や敗北感のなかに滲む家族への確かな愛情が、私たちの心を大きく揺さぶる作品でした。

上演7 鹿児島県立伊集院高等学校「そのひとの名前」

だれもが人間らしく、幸せに生きる権利があるはずが社会の無知による差別や偏見によってそれを人生ごとと奪われている人がいるという現状や、それを知らないままにいることの危うさを学びました。この作

品は決して歴史上の過去の出来事ではなく、誰もが同じように幸福な人生を生きるために、これからの未来に繋げていく必要があると感じました。

上演 8 千葉県立松戸高等学校「Happy Days」

登場人物たちと同じく演劇部員という立場にいる私たちにとって、この作品は今を自由に生きていくことの必要性和、自由に表現活動ができる現在の環境に対する感謝を改めて感じるものでした。生きること、演じること、愛することを通してつながれた想いが、今の私たちや遠い未来を形作るのだと感じました。

上演 9 秋田県立鹿角高等学校「きおくのき」

記憶はなくなっても思いは残り続け、誰かが大切に残してくれる。登場人物同士の関係性や、それによって生じる悩みや衝突から、それぞれの登場人物が抱く家族への深い愛情を感じました。そして、いつか自分たちが登場人物たちと同じような立場になったときどうするか、ということを考えるきっかけになりました。

上演 10 細田学園高等学校「春子杜」

友人のために時を超え、人という存在を超え、それでも折れずに走り続ける主人公の姿に胸を打たれる作品でした。未来へ向かっていきながらも、過去を自分の居場所にし続ける彼女は誰よりも人間らしく、不可逆な今を生きる私たちに新たな視点と勇気を与えてくれました。

上演 11 長野県立松本美須ヶ丘高等学校「親愛なるキティ『The Diary of a Young Girl』より」

キティとしてアンネ・フランクと言葉を交わしていくこの作品は、彼女の他愛ない日常に対する共感や戦時下に生きているだけの普通の女の子であった彼女を身近に感じさせるものでした。夢を叶える未来を奪われた少女の無念や悲しみを、そして彼女が夢を見ながら確かに強く生きていたことを、平和な今に生きる私たちが受け取り、覚えておくべきことだと思いました。

上演 12 長野県立松本県々ヶ丘高等学校「お前に自転車の乗り方を～チェルノブイリ 1986」

チェルノブイリ原子事故を題材にしたこの作品は、過去の経験を糧に未来へ進んでいく強さを感じさせるものでした。人間によって引き起こされる悲劇はすべて自分事であり、決して目を逸らさずにそれを自覚して現状に立ち向かう登場人物たちの姿が印象的でした。人によって築かれた壁は、人の力で越えていけることを、家族の絆を通して学びました。

全体講評は、これで以上になります。出場校の皆様、素晴らしい上演をありがとうございました。改めまして、三日間本当にお疲れ様でした。